

ルイズ・ラウス &
アグステイン・スピネット

Louise Rouse & Agustín Spinetto
Sounds from Liminal Towns

Sounds from Liminal Towns



「Sounds from Liminal Towns」と一緒に思い出し、感じとる ゴロウィナ・クセーニヤ

「家/home」と呼ぶならわし、多くの場合、人々の心には戻ることができない特殊な「家/home」が存在している。このような「家/home」はもとの所在地にあって実際に再訪できる場合もあるが、それが人々の記憶に宿ったときとすべてが同じような状態で経験されることは滅多にない。

この「家/home」の色や手触り、音、香り、味は、新たな感覚が重ね合わさりながら絶えず変貌し、多感覚に記憶される。越境する人々にとっては、とくに生まれ育ちないし移住する前に住んでいた家から時間によってだけでなく、広大な空間距離によっても切り離されるため、これらの「家/home」に帰れない状態はより深刻になってくる。その場合、自分の「家/home」を再訪し、再び体験するためのもっとも確実な方法は記憶である。しかし、個人の記憶へのほかの人々が出入りすることは可能なのか。サイエンス・フィクションにおいては、他人の記憶へのアクセスを可能にする未来的な機器がよく描かれるが、現代アートはそれと同じ効果をもたらすことができるのだろうか。

この展覧会はまさしくこのような経験を提供している。移住者でありアーティストであるルイーザ・ラウスとアグスティン・スピネットの「Sounds from Liminal Towns」は、日本各地で暮らす5人の女性移住者の現在・過去の「家/home」の記憶を、観衆に情緒的に想像させる。2人のアーティストは、女性たちにインタビューをして、彼女らの周りにあるものと、それらとの関わりについて語ってもらったのち、マンガン粘土、木材、紙、藁、布といった素材でそれらを創造的に複製した。その多くは、素材も模様も彼女たちの自宅にあるものと類似性が高い。しかし、これらは女性移住者たちから借りたものではなく、複製されたことは、実際のものや出来事ではなく、イメージや再現をとおして機能する記憶の働きと通底している。ものには色や影、温度、音が与えられ、それらを観衆が情緒的に経験する多感覚な作品となった。このようにさまざまな性質が加わることで、実際にモデルとしたものよりも、より感覚的につかみやすい作品となった。

作品は、インタビュー当時の様子を順序立てて再現するよりも、パッと浮かんで消えるような人の記憶の理屈にもとづいて、感覚のディテール―タイル張りの屋根を覆う青緑色の銅、サボテンの粗い表面、到着する新幹線のアナウンスなどに焦点を当てて並べられた。断片化された感覚が立体的にコラージュされるにつれて、我々は他人の精神をとおして世界と関わるかのような超越的な体験をする。

2人のアーティストは、とある人の過去の記憶が現在をとおして訪ねられていること、またその逆を示すフレーミングの手法を採用している。本展の協力者の現在の自宅にあるものと同じ藍色の布が、山深くにあった彼女の日本での最初の―そして今はもうない―住まいのイメージを包み込んでいる。また別の協力者の出身国にある松林は、現在の彼女のアパートの入り口を取り囲んでいる。記憶は混じり合うこともある。ターコイズ色の花が冷たいコンクリートの壁を打ち破っているが、協力者が母語におけるこの花の名前を思い出すことを躊躇ったため、ここでは日本語名で呼ばれている。

また、時間との音響的な関わりによって示されるものもある。たとえば夕方5時のチャイムは、自然災害が多い日本で警戒を怠らないよう呼びかけている。このチャイムは自然災害への警戒を呼びかけると同時に、赤ん坊がわけもなく泣き、とおりかかる人の顔が見分けられなくなる黄昏時の到来を示している。このように、見分

けられないことは、観衆にそれらがだれか他人の記憶の中にいることを思い出させ、現在へと引き戻している。

そして、その時間が数字を呼び起こす。この展覧会に「5」がとりわけ多くあらわれるのは、この数字がアーティストと協力者にとってなにか神秘的な意味合いをもっているからだろうか。とある番地にある、とある番号のアパートの、扉のロックを解除するための番号は、記憶の感情的な側面を観衆に思い起こさせる。その次元において、時計は存在しない。時間は、国境を超えてひとつになった湖の波の動きと、女性たちの声のリズムと声色によって測られるのである。私たちは記憶が過ぎ去り消えるのを少しでも長く留めようとするが、この展覧会では、記憶を感覚的に捉え心の外に表す、そんな不可能とも言えることを達成させた。

展覧会のタイトルにあるように、アーティストが私たちに注目してほしいと考えるもう一つの側面はリミナリティ(境界状態)である。経験した当事者ができごとの発生したもとの時間と場所、また現在においても不在のため、記憶はリミナリティ(境界状態)そのものである。しかし、リミナリティ(境界状態)は、女性移住者が自己認識を再構築する際に、人生を切り開くプロセスにおいても見られる性質である。多くの女性移住者は再構築を常に実践しているが、その過程においてつねづね指標となるのは、移住前や現在の、また将来における想像された「家/home」と物質性である。また今回、協力を依頼したのが日本の小規模都市や農村に住まう女性移住者だったことで、周辺化されがちな地理や人口、コミュニティ、実践の感情的な風景を浮き彫りにさせ、この取り組みにフェミニズムの観点を与えたのである。

最後に、この展覧会はその2人のアーティストによる、受け入れ国や「家/home」、記憶、ノスタルジア、帰属意識、コミュニティを巡る長年にわたる創造的探究を、オートエスノグラフィー(自分の過去の経験を書き記し当時経験した感情を社会的な意味に捉え直す作業)として捉えることができる。「Sounds from Liminal Towns」はこのようにして、観衆を自身の越境や居場所探し、ホームメイキング、コミュニティの一員になることの経験に深く立ち入らせようとする。アーティストたちが示しているように、記憶はその感情の領域に私たちを引き込み、これからの日々を創造するインスピレーションの源となるのだ。私たちは、自分の過去の「家/home」に戻ることは決してできないが、それについての記憶を具体化し、共有することはできる。

<p>ゴロウィナ・クセーニヤ</p>
<p></p>

サントペテルブルク(ロシア)出身。東洋大学社会学部国際社会学科准教授。サントペテルブルク国立大学・東洋学部にて日本学を学んだ後、2007年に東京大学大学院・総合文化研究科にて文化人類学を学ぶために入学、2012年に博士(学術)取得。著書に『日本に暮らすロシア人女性の文化人類学―移住、国際結婚、人生作り』(明石書店、2017)。現在の研究テーマは、日本におけるロシア語圏の移民について、住まい、ホームメイキング、場づくり、創造的実践、ライフサイクルなど。

Re-membering and sensing with the Sounds from Liminal Towns Ksenia GOLOVINA

「家/home」と呼ぶならわし、多くの場合、人々の心には戻ることができない特殊な「家/home」が存在している。このような「家/home」はもとの所在地にあって実際に再訪できる場合もあるが、それが人々の記憶に宿ったときとすべてが同じような状態で経験されることは滅多にない。

この「家/home」の色や手触り、音、香り、味は、新たな感覚が重ね合わさりながら絶えず変貌し、多感覚に記憶される。越境する人々にとっては、とくに生まれ育ちないし移住する前に住んでいた家から時間によってだけでなく、広大な空間距離によっても切り離されるため、これらの「家/home」に帰れない状態はより深刻になってくる。その場合、自分の「家/home」を再訪し、再び体験するためのもっとも確実な方法は記憶である。しかし、個人の記憶へのほかの人々が出入りすることは可能なのか。サイエンス・フィクションにおいては、他人の記憶へのアクセスを可能にする未来的な機器がよく描かれるが、現代アートはそれと同じ効果をもたらすことができるのだろうか。

この展覧会はまさしくこのような経験を提供している。移住者でありアーティストであるルイーザ・ラウスとアグスティン・スピネットの「Sounds from Liminal Towns」は、日本各地で暮らす5人の女性移住者の現在・過去の「家/home」の記憶を、観衆に情緒的に想像させる。2人のアーティストは、女性たちにインタビューをして、彼女らの周りにあるものと、それらとの関わりについて語ってもらったのち、マンガン粘土、木材、紙、藁、布といった素材でそれらを創造的に複製した。その多くは、素材も模様も彼女たちの自宅にあるものと類似性が高い。しかし、これらは女性移住者たちから借りたものではなく、複製されたことは、実際のものや出来事ではなく、イメージや再現をとおして機能する記憶の働きと通底している。ものには色や影、温度、音が与えられ、それらを観衆が情緒的に経験する多感覚な作品となった。このようにさまざまな性質が加わることで、実際にモデルとしたものよりも、より感覚的につかみやすい作品となった。

作品は、インタビュー当時の様子を順序立てて再現するよりも、パッと浮かんで消えるような人の記憶の理屈にもとづいて、感覚のディテール―タイル張りの屋根を覆う青緑色の銅、サボテンの粗い表面、到着する新幹線のアナウンスなどに焦点を当てて並べられた。断片化された感覚が立体的にコラージュされるにつれて、我々は他人の精神をとおして世界と関わるかのような超越的な体験をする。

2人のアーティストは、とある人の過去の記憶が現在をとおして訪ねられていること、またその逆を示すフレーミングの手法を採用している。本展の協力者の現在の自宅にあるものと同じ藍色の布が、山深くにあった彼女の日本での最初の―そして今はもうない―住まいのイメージを包み込んでいる。また別の協力者の出身国にある松林は、現在の彼女のアパートの入り口を取り囲んでいる。記憶は混じり合うこともある。ターコイズ色の花が冷たいコンクリートの壁を打ち破っているが、協力者が母語におけるこの花の名前を思い出すことを躊躇ったため、ここでは日本語名で呼ばれている。

また、時間との音響的な関わりによって示されるものもある。たとえば夕方5時のチャイムは、自然災害が多い日本で警戒を怠らないよう呼びかけている。このチャイムは自然災害への警戒を呼びかけると同時に、赤ん坊がわけもなく泣き、とおりかかる人の顔が見分けられなくなる黄昏時の到来を示している。このように、見分

けられないことは、観衆にそれらがだれか他人の記憶の中にいることを思い出させ、現在へと引き戻している。

そして、その時間が数字を呼び起こす。この展覧会に「5」がとりわけ多くあらわれるのは、この数字がアーティストと協力者にとってなにか神秘的な意味合いをもっているからだろうか。とある番地にある、とある番号のアパートの、扉のロックを解除するための番号は、記憶の感情的な側面を観衆に思い起こさせる。その次元において、時計は存在しない。時間は、国境を超えてひとつになった湖の波の動きと、女性たちの声のリズムと声色によって測られるのである。私たちは記憶が過ぎ去り消えるのを少しでも長く留めようとするが、この展覧会では、記憶を感覚的に捉え心の外に表す、そんな不可能とも言えることを達成させた。

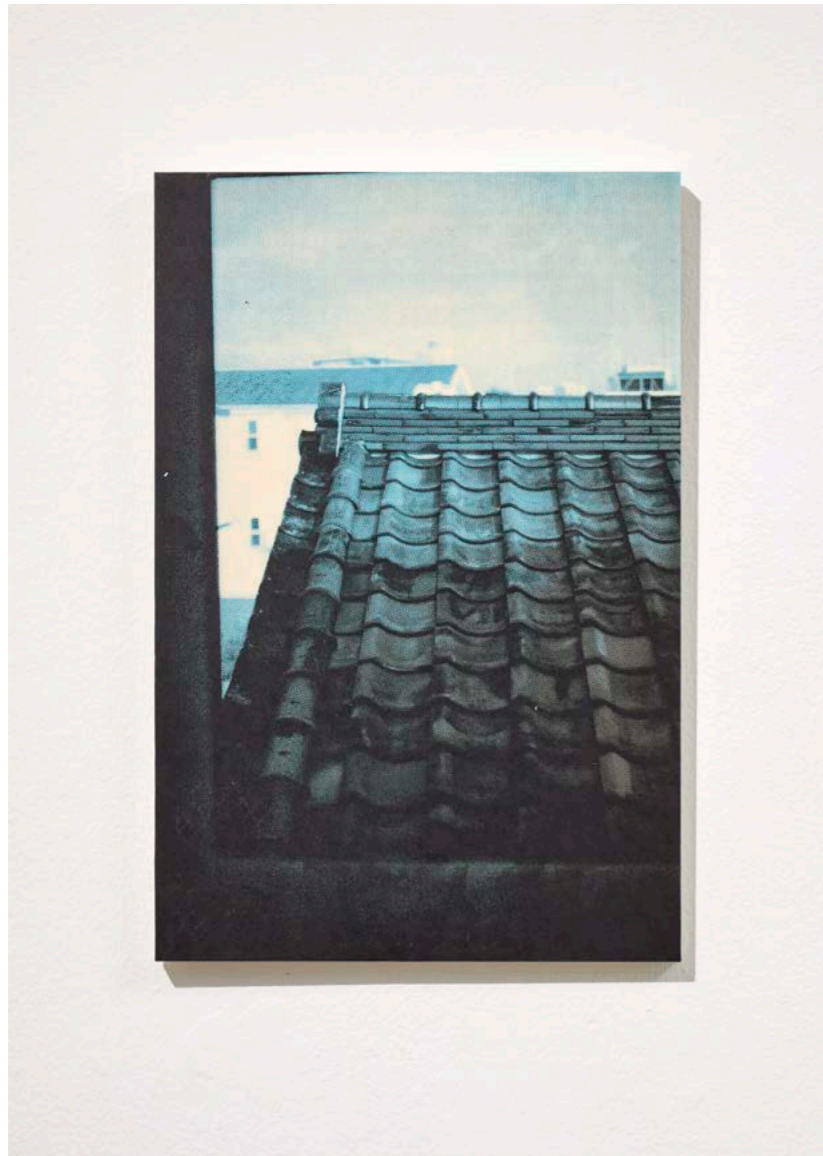
展覧会のタイトルにあるように、アーティストが私たちに注目してほしいと考えるもう一つの側面はリミナリティ(境界状態)である。経験した当事者ができごとの発生したもとの時間と場所、また現在においても不在のため、記憶はリミナリティ(境界状態)そのものである。しかし、リミナリティ(境界状態)は、女性移住者が自己認識を再構築する際に、人生を切り開くプロセスにおいても見られる性質である。多くの女性移住者は再構築を常に実践しているが、その過程においてつねづね指標となるのは、移住前や現在の、また将来における想像された「家/home」と物質性である。また今回、協力を依頼したのが日本の小規模都市や農村に住まう女性移住者だったことで、周辺化されがちな地理や人口、コミュニティ、実践の感情的な風景を浮き彫りにさせ、この取り組みにフェミニズムの観点を与えたのである。

最後に、この展覧会はその2人のアーティストによる、受け入れ国や「家/home」、記憶、ノスタルジア、帰属意識、コミュニティを巡る長年にわたる創造的探究を、オートエスノグラフィー(自分の過去の経験を書き記し当時経験した感情を社会的な意味に捉え直す作業)として捉えることができる。「Sounds from Liminal Towns」はこのようにして、観衆を自身の越境や居場所探し、ホームメイキング、コミュニティの一員になることの経験に深く立ち入らせようとする。アーティストたちが示しているように、記憶はその感情の領域に私たちを引き込み、これからの日々を創造するインスピレーションの源となるのだ。私たちは、自分の過去の「家/home」に戻ることは決してできないが、それについての記憶を具体化し、共有することはできる。

この展覧会はまさしくこのような経験を提供している。移住者でありアーティストであるルイーザ・ラウスとアグスティン・スピネットの「Sounds from Liminal Towns」は、日本各地で暮らす5人の女性移住者の現在・過去の「家/home」の記憶を、観衆に情緒的に想像させる。2人のアーティストは、女性たちにインタビューをして、彼女らの周りにあるものと、それらとの関わりについて語ってもらったのち、マンガン粘土、木材、紙、藁、布といった素材でそれらを創造的に複製した。その多くは、素材も模様も彼女たちの自宅にあるものと類似性が高い。しかし、これらは女性移住者たちから借りたものではなく、複製されたことは、実際のものや出来事ではなく、イメージや再現をとおして機能する記憶の働きと通底している。ものには色や影、温度、音が与えられ、それらを観衆が情緒的に経験する多感覚な作品となった。このようにさまざまな性質が加わることで、実際にモデルとしたものよりも、より感覚的につかみやすい作品となった。

作品は、インタビュー当時の様子を順序立てて再現するよりも、パッと浮かんで消えるような人の記憶の理屈にもとづいて、感覚のディテール―タイル張りの屋根を覆う青緑色の銅、サボテンの粗い表面、到着する新幹線のアナウンスなどに焦点を当てて並べられた。断片化された感覚が立体的にコラージュされるにつれて、我々は他人の精神をとおして世界と関わるかのような超越的な体験をする。

2人のアーティストは、とある人の過去の記憶が現在をとおして訪ねられていること、またその逆を示すフレーミングの手法を採用している。本展の協力者の現在の自宅にあるものと同じ藍色の布が、山深くにあった彼女の日本での最初の―そして今はもうない―住まいのイメージを包み込んでいる。また別の協力者の出身国にある松林は、現在の彼女のアパートの入り口を取り囲んでいる。記憶は混じり合うこともある。ターコイズ色の花が冷たいコンクリートの壁を打ち破っているが、協力者が母語におけるこの花の名前を思い出すことを躊躇ったため、ここでは日本語名で呼ばれている。





このフィールドワークでは、「移住の感覚的な体験は、場所への愛着をどのように構築するのか」という問いを立てた。アグスティンは5年前にブエノスアイレスから日本に移住し、私も英国を離れてから15年以上が経過している。この問いかけをする必要に迫られたのは、私たちが再び違う場所で生活と居住を築き、インターネットを通じてデジタルなグローバルネットワークやインフラへのアクセスが増えるにつれ、私たちが住んでいるのは日本でも、出身地でもないように感じたからだ。ある意味では狭間にいるようなもので、そこにコミュニティがあることに気づいたのだ。

カラーズされたコミュニティの地理を理解しようとするとき、出身地の記憶と新しい環境が重なり合うことで、移住を経験した人々は、意識と感覚的記憶の中で、非線形の地理への愛着を維持し、あるいはノンリニアな地理を構築できると想像される。これはなぜ重要であるかという、国境を越えた生活や人の流動が増大する中で、国境を越えたハイブリッドなコミュニティに対する共感とニュアンスが必要だからだ。日本では人口減少や高齢化社会の到来により、移民の問題が取り上げられているが、その言説には実質と繊細さが欠けていると感じていた。私たちふたりが、作曲家またはアーティストとして持つ音と視覚のバックグラウンドは、感覚的な経験や美学に対する感受性と関心から発展したものだ。これらの感性が、「移住」「地理」「複数の場所への帰属」というトピックを発展させるために使えると考えた。

.....

移住の体験はとても多岐にわたる。この展覧会は、私たち自身が経験してきたことに近い、小さな断片にすぎない。自分にとっての先輩にあたる女性、つまり、私自身と同じではないしろ、似たような道のりを歩んできた女性を探したいと思っていた。

最近、ゲーテ大学フランクフルト校のルース・アッヘンバッハ教授が、グローバル化された職場における、就労ビザを取得した労働者¹の女性の移住についての公開講座シリーズを主催された。アッヘンバッハ教授のシリーズに前提として共通するのは、私たちのような女性のための議論が不足しているという挫折感だ。移住は多様で交差性に満ちた経験であるため、それを意味する言葉が限られているのは問題である。

移民、観光客、駐在員。他に何かあるだろうか。追放者、宇宙人、エミグレ、外人、ノマド。どれもじっくりこない。

この足りない言葉は、本展のオープニングで「このインスタレーションは、観光パンフレットに載っているような典型的な日本を表していない」と言われたことで、より鮮明に浮かび上がった。そう、むしろ、新しい土地で何十年も暮らしてきた日常が、他人の目には観光客として映ることが、とても衝撃的だ。また、日本での駐在員 (ex-pat) のイメージも、バブル時代の時代遅れのもので、女性がイメージされることはほとんどなく、単語として役立つ。現在では、日本の大学で学ぶ学生が卒業後も日本への残留を検討したり、その一方では海外で学位を取得した卒業生が日本のビザを取得したりして、半永久的あるいは完全に永住するケースが多く、大都市・コスモポリタンな東京から遠く離れた地域でも、平均的な年取で暮らしている。

女性にとっては、さらに解決しなければならないことがたくさんある。避妊具を入手することの難しさ、職場のガラスの天井、外国人女性がいわゆる正社員として働くことがとくに難しい、その二層構造の労働制度などである。妊娠と出産は、女性の声を軽視する医療文化の中で、レイズムや身体的主体性の低下との断続的な遭遇を媒介とする。校庭は、マイノリティの親たちと教育

委員会との価値観が対立する場でもある。離婚によって、とくに広い家族のネットワークから孤立すると、多くの人々が烙印を押され、経済的に不安定となるリスクにさらされる。高齢者となってからの退職と医療は、女性移住者が新たに直面する問題だ。この展覧会にご協力いただいた女性たちは、それぞれの人生というレンズを寛大に提供し、世代を超えたライフステージを通じて、日本における外国人という既存の概念、そしておそらく日本という国そのものの概念に異を唱えているのだ。

昔、私は日本の農村部で山岳ガイドのアルバイトをして、日本のいたるところで国境を越えた生活をしている人がいることを知った。今回のテーマでは、地理は意識の中で重なり合い、創造されるという考えが、東京と比べて国際的なインフラやネットワークが少ない地域に住む女性たちの経験にも見られるかどうかを、確かめたいと思った。その結果、私たちが当初想定した以上に、そのような傾向にあるとわかった。

.....

このプロジェクトでは、全国の外国人の婦人会、そしていくつかの大学の研究科を通じてメーリングリストなどで協力者を募集した。友人らが他の友人へメッセージを伝えてくれた結果、5人のボランティア— アンドラ・グロス、ジュディ・ダッチャー、カレン・ヒル・アントン、サラ・マルグヴィー、ローラ・ロドリゲス— が、このプロジェクトと一緒に取り組んでくれることになった。

このプロジェクトは、研究と芸術的実践のあいだの新たな領域に位置している。他分野の研究から最適手法を取り入れながら、展覧会を作るという作業は共同作業の一形態であり、そのために芸術的実践に根ざした独自の方法を作り上げる必要があると考えた。ひとつには、学問的な研究では、普段、インタビューした人の名前を隠す必要がある。しかし、アートや音楽では、コラボレーションを明確にすることが非常に重要である。

初期におこなったZoomミーティングでは、まず始めにこのプロジェクトでは、どの程度個人情報やプライベートのことが公になるか説明したうえで、名前を出すかどうかの選択肢について説明し、その後、実際に訪問したときに、一人ひとりに公開する名前を決めてもらった。今回はみな研究に寄せた匿名ではなく、アートや音楽の分野におけるコラボレーションの例に寄せて実名を表記することを選んだ。プロジェクトに協力してくれた皆さんにとって、これが正しい道であることを願っているし、私も一人ひとりの意見を応援する気持ちでいる。この旅の途中で出会った人生を皆さんにも知ってほしい、そして、その世界観の断片を知ることに関心を感じてほしいと願う。

.....

生きた経験をすべて集め、それを表現しようすると、必ず限界がある。レプリゼンテーション (再提示) するためには、直線的な時間の中で生きている360度の空間を縮小して編集し、代わりに何かを作り出すことが必然となる。私たちは、この訪問のどの部分を伝えるべきかを選択する必要があった。

基本的な手順は次のとおりだ。各人が住んでいる場所の近くに滞在し、その場所で見つけた音を昼夜にわたって録音する。とくに建材の質感、街並み、農村や郊外の地形に注目し、写真を撮りドローイングをして観察した。また、一人ひとりにインタビューを行い、現在の家庭環境で意味を持つものを歯科用のアルジネット印象材で型取りした。

プロジェクトが進むにつれ、その地域をその人がよく使う交通手段だけで移動してみようか、その人が好きなレストランで食事をしたり、その人が使うスーパーで買い物をしたり、その人が普段やっていることをやってみようか、といった思いが強くなった。それがいいのか悪いのかわからないままにやってみて、演じるキャラクターを徹底的に研究し、しばらくそのキャラクターになるという追体験の演技法が、いかに体現型研究であるかということに気づかされた。アカデミックな研究が自動化されたデータ解析中にどんどん入り込んでいく中で、このような体験への細やかな配慮や臨場感に欠けてしまったのかもしれない。

私たちは、展覧会には入りきらない、現地の詳しい情報をたくさん知ることができた。たとえば、浜松市ではポルトガル語のアナウンスが浜辺で流れていた。天竜の民宿には、東南アジアからの工場労働者が「研修生」ビザで滞在していて、私たちが同じ民宿に泊まった。そのうちの一人は到着したばかりで、長い一日の後に「ガッツリ系」のカレーを食べて、おかみさんにとっても感謝し、一緒に簡単な日本語を練習していた。岐阜では、アンドラの友人で姫路に住むルーマニア人の女性が、わざわざ会いに来てくれて、彼女は英語が話せないため、日本語と一緒に話をした。私たちはステレオタイプな観光地ではない、日本の普通の郊外の町を、毎日、次から次へと渡っていたのだ。知多半島はその中でも例外的な場所だったのかもしれない。内海はうら淋しい場所であり、しかし今も名古屋市民の日帰り旅行先として賑わっている。薄ぼんやりした昭和チックな海辺、背後には昔ながらの集落、奥には水田が広がっている。カフェの店主は内海を「便利な田舎」と表現した。岐阜、郡山、浜松は日本の標準的な小都市で、郊外の中心地であり、区画整理があまり進んでいないために公共交通機関よりも車での移動がしやすいただただ広い街となっている。最後に、天竜は浜松からそれほど遠くない、内陸の山間部にある小さな町だ。

.....

今回の記録で驚いたことは、大きく分けてふたつある。ひとつは、「受容」と「失見当 (ディスオリエンテーション)」というテーマにより多く出会ったということ。オリエンテーションとはコンパスや地図を意味する言葉であるから、ディスオリエンテーションとは地図の断絶のことかもしれない。私自身の経験を反映したような分裂、疎外、不確実性があると予想していたが、いくつかのケースでは、飛行機の車輪のように、しっかりとした固い舗装路に完全に着陸するという地理的な話を聞くことができた。今このライフステージで、日本から離れることはあまり考えられないと確信し、それを受け入れることで少し安らげるようになった。しかし、行きつ戻りつという意識はいつも存在し、私たちの芸術的解釈には、常に呼び掛けとその呼応、マトリックス (母型) とコピーを見ることができ

次のページではこの展覧会の物質性と、日本、ルーマニア、カナダ、アメリカ、メキシコの国境を越えたマルチジオグラフィの喚起について詳しく紹介する。

1. 就労ビザの種類や、外国人が就労ビザを取得する際の要件は各国の移民政策によって異なり、就労ビザの種類を指す区分やその意味も誤差がある。ゲーテ大学で公開されたのは、国によって若干異なった意味を持つこれらのカテゴリにおける女性労働者についてのシリーズ講座。



In this fieldwork we set out with a question—How do the sensorial experiences of migration construct attachments to place? Agustín moved to Japan five years ago from Buenos Aires, and for myself it has been over fifteen years since I left the UK. We needed to ask this question because over time, as we built our lives and homes again in another place, and with increasing access to digital global networks and infrastructure through the internet, it came to feel as if we are not living exactly in Japan, yet neither in the geography from which we originated. We were in some kind of in-between space and we noticed that there is community there.

In trying to understand the geographies of collaged communities, we imagine that the overlaying and overlapping of memory from places of origin with a new environment enables those who experience migration to maintain attachments to non-linear geographies, or perhaps construct non-linear geographies, in their consciousness and sensory memory.

This is significant because movement of lives and people across borders is increasing and more empathy and nuance about a growing spectrum of hybrid cross-border communities are needed. In Japan, demographic decline and an aging society foreground migration questions but we felt that the discourse is currently lacking in substance and subtlety.

Our sound and visual backgrounds as a composer and an artist respectively developed from our sensitivity and concern with sensory experiences and aesthetics. We felt that these sensitivities could be used to develop this topic of migration geography and migratory attachments to multiple places.

.....

Migration experiences vary a lot. Our exhibition presents a tiny fragment, close to our own lives. Particularly I wanted to find women who might be my senpai, those who were further along in a journey that was similar, although not the same as my own.

Recently, Dr. Ruth Achenbach, an academic at Goethe University Frankfurt put together a public lecture series about female skilled labor migration across the globalised workplace. Something I share with the premise of Dr. Achenbach's series is a frustration about the lack of discourse for women such as ourselves. Since migration is such a diverse intersectional set of experiences, it is problematic to only have a few words to talk about it: Migrant, tourist, ex-pat. What else do we have? Exile, alien, émigré, foreigner, nomad. None of them seem to fit. This missing language was brought into sharper focus during the opening to this exhibition, when someone said that this installation "does not represent the typical Japan that you find in tourist brochures." No, in fact, it can be quite a jolt as you go about your daily life, decades lived in a new home, to be reflected as tourists in another's eyes. The image of the ex-pat in Japan is also of no use here, outdated as it is from the bubble era, and rarely imagining women. More frequently, now, inbound students with modest means at Japanese universities consider staying, or those with degrees from abroad navigate through visa systems and settle semi or fully permanently with average salaries, far beyond the reach of cosmopolitan Tokyo. For women there is a lot extra to figure out: Poor access to contraception, glass ceilings at work and a two-tier labour system that puts

foreign women especially unlikely to secure full time work on so-called seishain contracts. Pregnancies and births are mediated around intermittent encounters with racism and reduced bodily agency in medical cultures that deprioritise women's voices. School yards are places of conflicting values between minority parents and school boards. Divorce puts many at risk of stigmatisation and economic precarity, especially when isolated from wider family networks. Retirement and medical care in advanced age are new arenas for women migrants to contend with. Each woman in our exhibition generously lends the lens of their own lives and through their intergenerational life stages, they challenge existing notions of the foreigner in Japan, and perhaps the notion of Japan itself.

A long time ago, I worked as a guide in rural parts of Japan and knew of transnational lives in all corners of the country. With our topic, I wanted to see if our idea that geographies overlap and are created in consciousness was also found in the experience of women living in parts of Japan where it is rarer to find international infrastructure and networks compared to Tokyo. We did find this to be the case, and even more so than we first thought.

.....

We sent out open calls through womens' associations in Japan, as well as some mailing lists via university departments. Friends passed on the messages to other friends and five volunteers agreed to work on this project together. These were Andra Grosu, Judi Dutcher, Karen Hill Anton, Sarah Mulvey and Laura Rodríguez.

Our work in this project is situated in an emerging field between research and artistic practice. Even as we absorbed best practices from other fields of research, we also felt that the work of making the exhibition was a form of collaboration and so it was necessary to create our own methods rooted in artistic practice for the work. For one thing, in research it is necessary to hide the names of anyone interviewed. In art and music however, it is very important to acknowledge collaboration.

We went through the options for being named in early Zoom meetings, and then received each person's decisions when we visited. Each person independently chose to be named following art and music conventions rather than to be anonymised. I hope that this continues to be the right path for everyone who collaborated on this project and I also felt in agreement with each of them. I want you to know the lives that we met along this journey, and to feel a sense of responsibility in knowing fragments of their global landscapes.

.....

There will always be limitations in gathering full lived experiences and trying to represent it. Re-presentation necessarily requires an edit to reduce 360° of space, lived in linear time, producing instead something that stands in for it. We needed to choose which pieces of our visit to communicate. Here were our basic procedures: we stayed nearby to the location where each person lives, recording sounds that we found in those locations over a number of days and nights. We photographed and drew different areas in that location, especially noticing textures of building materials, streets and topographies of rural and suburban space. We interviewed each person, and also made a dental

alginate mold of an object that held meaning in their current domestic environment.

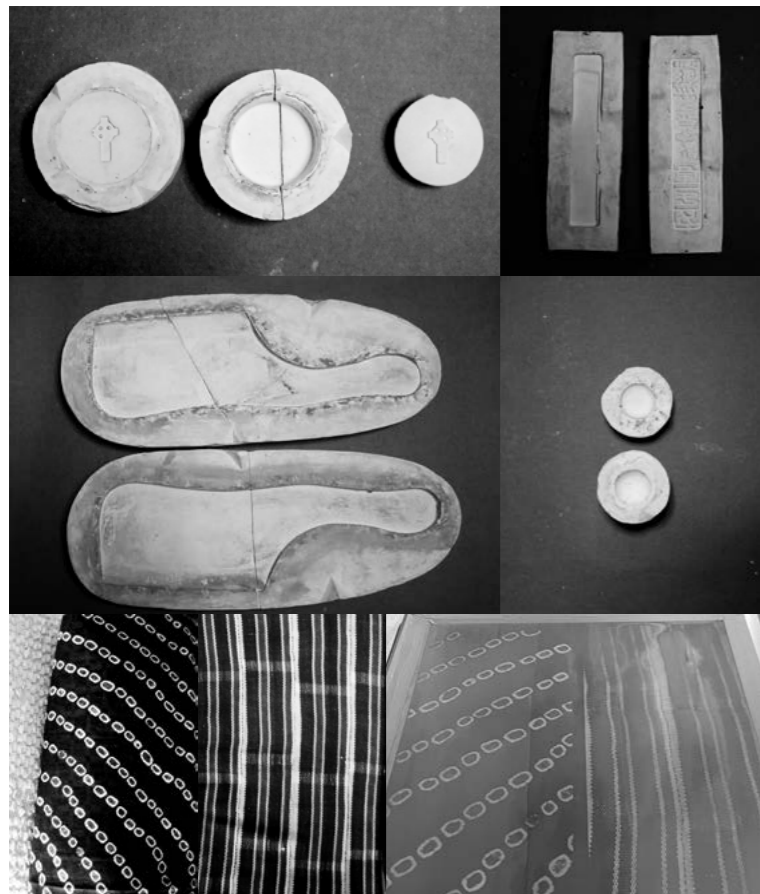
As the project went on, we wondered more about whether we should try to travel around in that area using only each person's typical modes of transport, or to eat at the restaurants that they liked, or shop in their supermarket and do things they normally do. We didn't know if this was good or not but we tried it and we reflected how much method acting is a kind of embodied research similar to what we were doing. Academic research that creeps more and more into automated data analysis is perhaps missing this detailed attention and presence to the experience.

We learned a lot of local details that could not all enter the exhibition. For example, we heard Portuguese announcements from Hamamatsu municipal government played on the beach. We stayed in the same minshuku in Tenryu where factory workers from southeast Asia were living while on "intern" visas. One had just arrived and was so grateful to the okamisan for gatsuri-kei (hearty and heavy) curry after a long day, practicing very simple Japanese with her. In Gifu, Andra's friend, another Romanian who lives in Himeji traveled all the way to the restaurant and we spoke together in Japanese as she did not speak English. We were in parts of Japan that are definitely not stereotypical tourist destinations, day after day, one after another in ordinary suburban towns. Chita hanto was perhaps the outlier to this. A little forgotten, Utsumi still ticks over as a daytripper destination for Nagoya residents bound for the beach. It has a faded seaside charm backing onto older villages behind it with rice paddies towards the interior. A café owner we met described it as benri na inaka. Besides this area, Gifu, Koriyama and Hamamatsu are small cities by Japan's standards—built up suburban hubs with little zoning and the kind of sprawling layouts that are easier to navigate by car than public transport. Finally Tenryu is a much smaller town not too far from Hamamatsu, edging on more mountainous areas further inland.

.....

What was surprising among the experiences we recorded, for me, were broadly two things. One was how much more we encountered the theme of acceptance vs disorientation. Orientation is a word for compasses and maps, so disorientation might be a rupture of the map. I expected to find such schisms, estrangement and uncertainty that mirrored some of my own experiences, but in some cases, we heard about the geography of landing fully, like the plane wheels, on solid intractable tarmac. Knowing for sure at this life-stage that there was not much consideration left for leaving Japan and some measure of peace from that acceptance. Nevertheless the consciousness of back and forth was ever present, and in our artistic interpretation we see the constant call and response, matrix and copy.

On the following pages we pick out in detail this materiality of the exhibition and its evocations of these transnational multigeographies of Japan, Romania, Canada, US and Mexico.



東京ではパートナーのアルベルトと暮らしていて、彼はインドネシア人の陶芸作家で、毎朝コーヒーを入れ、植物に水をやり、すぐに型と粘土を使った作品を作り出す。私はガタガタの借家の反対側で、あくびをしながらじわじわ起きた後に、紙と木と刃物とEメールとのあいだを慌ただしく動き回る。穏やかさと混沌。私たちを結びつけるのはこの都市そのもので、ロンドンとインドネシア、2つの地理に挟まれて両側からの引っ張りに耐えている東京。そして、私たちがお互いに創作に使う素材でもある。これらは、3次元を再現するための型であり、2次元(あるいは2.5次元)版のマトリクス(母型)だと思う。

このプロジェクトにおいて、それぞれの場所で歯科用アルジネートを使って型をとったオブジェクトは、アルベルトが持つ石膏型加工技術のおかげで、マンガン粘土で再現することができた。そして展覧会に備えた版画や布。私は高校の終わり頃から版画を学び、それによって徐々に、これらの素材に内在するコンセプトをほめめかすことができるようになってきた。

プリントメーカーとは、常にものを反転させて見ている。自分が実際に作る版と、その版から作り出されるイメージとのあいだには、常に「反転」がある。展覧会全体をとらえて、この二重化は繰り返される。反転は、内海や郡山での映像のようにはっきりしている場合もあれば、オブジェそのものに隠されてしまう場合もある。

畳の「砂浜」の先に映っていた湖と海の映像は、サラとジュディの住まいの近くにある水域から生まれたものである。2人はともに日本での住まいの近くにある水域に惹かれたようだが、実は2人は五大湖を挟んで、それぞれ米国とカナダの対岸で育っていた。別の大陸で別の人生を歩むお互いを、知らず知らずのうちに見つめ合っていたのだろう。たとえば、彼女たちが生まれ育った町へ向かう道について尋ね、まるで絵を描くように、じっくりと思いつきながら話してもらおうと、木々や湖畔のほとりが、日本での記憶ではもっと身近にある水辺と波打つ言葉で繰り返された。

私は訪問先で観察した布地とその質感を展示空間でも再現しようとした。たとえば、カレンの家には、日本の藍染めのような風合いを持つガーナの布が2枚あった。この布を展覧会で再現すると、それは私たちの故郷の記憶と同じように、オリジナルとは多少のずれや不正確さを伴いながら、記憶の旅を続けることになるのだ。

アンドラが岐阜で営むルーマニア料理店では、店内に飾られた木の切れ端を撮影した。アンドラは、田舎の実家での夏を思い出しながら、木の心地よさについてよく話してくれた。それを水性技法で木版画に再現しながら、木を使って二次元的レプリカを作る不思議さを感じていた。少しのずれを生じさせながら、私たちのフィールドワークの記憶が蘇る。それはジュディの住まいの近所にあり、昭和から残る団地で見つけた奇妙な手書き文字が彫られた表札と同じく、米国と郡山、どちらにもある松林に包まれたものだった。私たちはラウラと一緒に、彼女にとってのアカプルコである浜松の海辺で1日を過ごした。そして彼女の子どもたちに泳ぎを教え、一緒に砂の城をつくった。ファミリーマートで買った「アメリカンドッグ」を食べながら、ラウラからメキシコの新鮮な魚の話聞いた。

このように、それぞれの場所で同じ時間を過ごしてもなお、それぞれの人が話してくれた場所に完全に入り込むことはできなかった。そこで展覧会では、個別の空間を割り当てながらも、それぞれの作品にはキャプションをつけなかった。ここで紹介した地理的な断片を、あなたの人生の風景を通過した道のりと対話の中で体験するかもしれない。



In Tokyo, I live with my partner Albert, who is a ceramic artist from Indonesia. Everyday he wakes up and makes coffee, waters the plants and soon begins his work with molds and clay. On the other side of our rickety rental house, I yawn to life before scurrying about with paper and wood and knives and emails, all a flurry. Calm and chaos. Holding us together seems to be the city itself, situated in tension between our two other geographies, and also, the materials we create with. These are the molds for reproducing three dimensions and the print matrix for two, (or two point five, perhaps.)

I was able to bring back the dental alginate molds made in each location and with Albert's help for the plaster molds, recreate each object in manganese clay. For the prints and fabric in the exhibition, I have studied printmaking since around the end of high school and since then have gradually come to find the conceptual hints that lie within the making with these materials.

As a printmaker you are always looking in reverse. There is the constant flipping between the matrix which you create directly, and the image which creates itself against it. Throughout the exhibition there are repetitions of this doubling. Sometimes it is explicit as in the videos of Utsumi and Koriyama, but sometimes it is hidden in the object itself. The videos of lake and ocean at the end of the tatami beach, came from expanses of water nearby to Sarah and



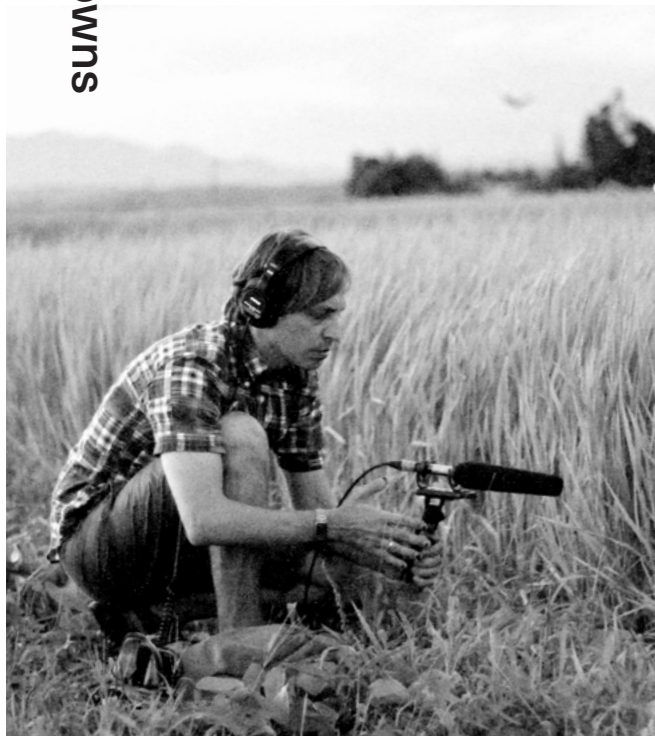
Judi. They both seemed to be drawn to the water near their homes in Japan and in fact grew up on opposite sides of the US/Canada border over the five great lakes. Perhaps unknowingly they looked out at each other in another lifetime in another continent. As we asked them individually about for example the road leading into their town, slowing down to think about the landscape as if it needed to be painted from this description, the trees and the lakeside beaches recurred in lapping sentences with waters much closer by in memory to Japan.

I recreated fabrics and textures that we observed as we visited. For example in Karen's house, several textiles from Ghana that have the appearance of indigo dyeing from Japan. Recreating this fabric again in the gallery, it continues its journey in memory, with some inaccuracies and shifts from the original just as our memories of our hometowns.

From Andra's Romanian restaurant in Gifu, I photographed slices of wood that decorate the interior. Andra talked a lot about the comfort of wood, remembering summers in her parents place in the countryside. I recreated these in woodblock prints using water-based techniques and found the strangeness of creating a two dimensional replica of wood—using wood to make the print. It was slightly off but it jolted memory to a moment on our trip, as did the laser-cut name plate with uncanny hand drawn typography finding form from a Showa period apartment block in Judi's neighborhood, wrapped in the pine tree canopy of both the US and Koriyama. With Laura we spent the day at the beach, her Acapulco of Hamamatsu, teaching her children to swim in the ocean and make sandcastles. Laura told us about the fresh fish in Mexico as we ate corn dogs from Family Mart.

Even spending this time in these places, we could not completely be in the places each person described to us, and so in the exhibition, although allocating parts of the space individually, we left each work unlabelled so that you might experience the fragments of geographies mentioned here in conversation with your own journeys through the landscapes of your life.

a rough but quiet noise [softly] stops
 starts again [done by very precise movements. softly stops - starts again] monotonous rhythm and long scratches like an incomprehensible language.



音探しの過程において、私たちは大きく分けてふたつの前提に従うことを決めた。まず、各人が述べた場所や経験については、インタビューの後も訪れることができるように、丁寧に聞き取りを行った。そして、その場所での記憶や体験から、録音可能な音を探ることに重点を置いた。また、その場所を取り囲む環境音についても、できる限りのレコーディングを行った。たとえば、カフェ、公園、商店街、ビーチ、山奥の蕎麦屋、そして日本のほとんどの街で聞こえる夕方5時のチャイムを流すスピーカーに一番近い場所など、さまざまな場所に足を運んだ。

また、参加者が日常的な家庭での体験に言及することも多く、私たちはそれを有意義なことだと感じていた。万年筆で手紙を書いたり、コーヒーを用意したり、ヘッドホンを着けて電子ピアノを弾いたりといった例が丹念に記録された。

ふたつ目の前提は、私たちが訪れた町に関連する研究過程にとって意味のある音を録音することだった。それは、研究の協力者は言及していなかったかもしれないが、それぞれの町を識別するのに役立つ、移動中の音だった。そのため、電車のアナウンス、自動販売機、地元の売り子や住民同士の掛け声、広告のアナウンス、商店街や駅、バス停の環境音などを録音した。

音で、ある町と別の町を識別できるようにするのは難しい。浜松のセミと内海のセミはどう違うだろうか。カメラを向けるカメラマンと同じように、音の細部が決め手となった。福島湖の波の音は、内海のそれよりもずっと繊細で、商店のアナウンスにはその土地の名産品が頻繁に登場し、バスや電車では駅名が出てくる。これらの環境音はすべて、インタビューを再考し、協力者の経験をより広く知るために、東京に戻ってから制作した「音のアルバム」で活用した。

紙の冊子に音源を載せることはできないため、このページでは、本展で展示した音のいくつかを例として短いグラフィックポエムを載せている。どうぞ、ご自由に解釈し想像してみてください。

A simple melody comes from a distant loudspeaker. Serene. Seems like it is the sound of a bell, but it is not. [RAVEN INTERRUPTION] An electronic recording that badly imitates the timbre of a bell.

In the process of searching for sounds, we decided to follow two main premises. First, we carefully paid attention to places and experiences mentioned by the each person, so that we could later visit them. Once there, we put special focus on searching if there was any particular sound that was possible to record from the memories and experiences mentioned. We also did our best to capture the sound environment surrounding the area. This premise lead us to very different spots, such as cafés, parks, local markets, the beach, soba restaurants up in a hill or the nearest place possible to the loudspeaker that plays the one of several 5 pm melodies that can be heard in almost every town and city in Japan. Many times, the participants mentioned daily domestic experiences that we found it meaningful, such as writing letters with a fountain pen, preparing coffee or playing the electric piano with their headphones on. These situations were meticulously recorded and considered for the final mixdown.

The second premise was to record sounds meaningful for our research process related to the towns that we were visiting. These were sounds from our trip that may or may not be mentioned by the participants, that helped to discern each town. As a result, we recorded train announcements, vending machines, local vendors and dialogues between residents, advertising announcements, and also sound

environments from shotengai, train stations and bus stops.

Soundwise, it is complex to be able to identify one town from another. How can a cicada from Hamamatsu be different from one in Utsumi? Similarly to a photographer that points a camera, details were decisive. The sounds that the waves from a lake in Fukushima makes, are much more delicate compare to the ones from Utsumi's open sea, shops' announcements often mention the local specialty and buses or trains mention the name of the stations. All these are examples were used to create a "sound album" that, once back in Tokyo, help us re-think the interviews and to have a broader knowledge of the participant's experience.

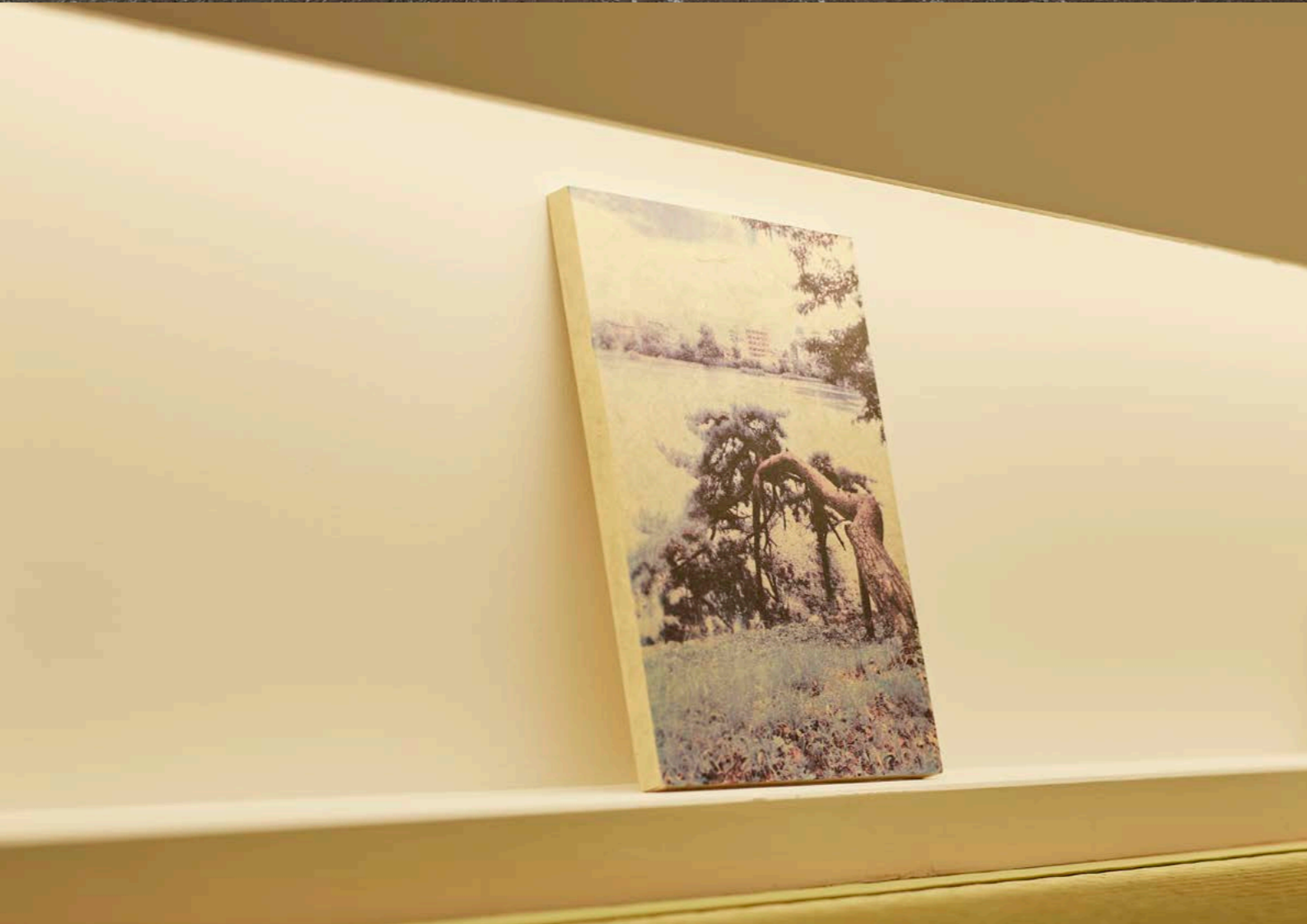
As it is impossible to add sound files to a paper catalog, so on this page are short graphic poems with the intention to exemplify some of the sounds included in our exhibition. Please, give yourself the opportunity to interpret them and imagine these sounds as you like.

A background sound that comes from the left side, intermittent
 An incomprehensible voice, approaches and passes by...

わび

ら餅

now it's on the right side. Almost painfully loud but it slowly fades away. The same phrases repeat once and again. Retreats...



協力者たちのフィードバック

Feed/back

Karen HILL ANTON, Judi DUTCHER and Laura RODRÍGUEZ

ジュディより

Message from Judi



ルイズとアウグスティンとの仕事は、目を見張るような、そして耳を“聴”張るような体験でした。彼らの作品に参加できたことは、とても嬉しいことでした。永住者に対する国の一員であることについての私の整理されていない考えや感情が、どのように芸術作品に組み込まれたかを目の当たりにして、私は驚きを感じました。彼らは、何時間にもわたる音声の中から関連するものを選び出し、音、言葉、物、光の万華鏡を作り出し、その相乗効果によって、私たちが現在故郷と呼ぶこの国のあるコミュニティーに生命を吹き込んでいます。

数ヶ月前、ルイズとアウグスティンとのインタビューが終わったとき、私は自分が共有したものがどのようにアートの一部になり得るのかわかりませんでした。私はプロセスの各ステップを通じて情報を与えられ、私が提供した小さなものが彼女らのプロジェクト全体の中でどのように活用されたかを理解することができました。彼らの芸術的な取り組みに参加できたことを感謝しています。



カレンより

Message from Karen

展覧会「Sounds from Liminal Towns」に協力してほしいと声をかけられたとき、正直なところ、このプロジェクトが何なのかよく理解できませんでした。しかし、このプロジェクトが、私が半世紀以上にわたって行ってきた「複数の地理」に住むという経験に焦点を当てたものであることに興味を持ちました。とくに、ルイズとアウグスティンのプロジェクトに対する熱意と尽力に魅力を感じました。

私は、この展覧会が非常に建築的であることに驚かされました。比較的小さなスペースであるにもかかわらず、その建築は時間と距離の両方を感じさせてくれました。私は、それに内在していた対照な姿に衝撃を受けました。父親が朝顔を育てていたことを話しながら自分でもその話を聴き、そして紙で作られた繊細な水色の花を見て、時間的にも距離的にも遠い場所にいた幼少期を思い出しました。

When I was invited to participate in and contribute to the exhibition "Sounds from Liminal Towns" I can honestly say I could not really grasp what the project was about. Still, I was intrigued by the idea, and fascinated that the project focused on the experience of living in "multiple geographies," which I have done for more than a half century. Most especially, Louise and Agustín's enthusiasm and dedication to their project drew me in.

I was amazed at how architectural the exhibition was. Considering it was a relatively small space, the construction gave me a sense of both time and distance. I was struck by what I saw as its juxtapositions. Hearing myself tell the story of my father growing morning glories, and then seeing the delicate paper-fashioned light blue flowers, I was reminded of my childhood in a place far away, in both time and distance.

Working with Louise and Agustín was an eye-opening as well as an ear-opening experience. It was a pleasure to be part of their art. I was amazed to witness how my unorganized thoughts and feelings about being part of a permanently adopted country were incorporated into a piece of art. They sifted through hours and hours of audio and picked out the relevant pieces to create a kaleidoscope of sounds, words, objects and light, the synergy of which brings to life a certain community in this country we now call home.

At the end of my interviews with Louise and Agustín a few months ago, I could not see how what I shared could ever be part of any art. I was kept informed through each step of the process, able to see how my small offerings were used in the whole of their project. I am grateful for having been included in their artistic endeavors.

ラウラより

Message from Laura

このプロジェクトに参加できて、とても楽しかったです。自分のこども時代や、生まれ故郷から遠く離れて日本で暮らすという決断について考えさせられました。

また、ほかの女性たちの物語にも共感できました。とても素敵で面白い作品だと思います。

I enjoyed being part of this project very much. It made me reflect about my childhood and my decision to live so far away from my birthplace, in Japan.

I could also empathize with other women's stories. I think this is a very nice and interesting work.



アンドラ

夏はとても眩しく、スイカは夏に食べる大好きな果物で、母がいつも買ってきてくれた。アパートに住んでいたころ、私は5歳で、父が大きなスイカを持ってきて、キッチンで切って食べていたのを覚えている。そして、午後1時に母が私たちを寝かしつけたあと、私が目を覚ますと、午後1時から2時くらいだったろうか、部屋の中に太陽の光が差し込んで、とても暖かい雰囲気を感じたことを覚えている。

アンドラは、静かな道、そして、通りの向こう側にはりんご畑があった。

ジュディは静かな道、とても静かな道だった。そして、通りの向こう側にはりんご畑があった。りんご、洋梨、もも。通りを挟んで一番近くの隣人の家までは、歩いて1、2分…声が聞こえないくらいの距離だった。

道はまっすぐで長くで…。私は裸足で歩くのが好きだった。道路は暖かく、夏はとても気持ちよかった。道路は私たちの遊び場の一部で、そこで遊ぶことが許されていたのよ。変に聞こえるかもしれないけど。

カレンは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

おじさんが小さなカートでやって来て、瓶から緑や赤や黄色の、いったい何が入っているかわからないようなものを氷の上に注いでくれるんだけど、そのころ本当に、「これ以上に素敵なものなんてないでしょう?」って感じだった。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

サラ

どの通りにも本当にたくさんの樹々と家々がある。家々は通りからかなり奥まったところにある。少なくとも緑地を挟むくらい奥まっいて、たいていは庭やメープルの木なんかがあったりする。

そして、2つの大な湖の間にあるの。ヒューロン湖とエリー湖。その2つの湖からやってくる湿気の影響で雪が降り注ぐので、このあたりはスノーベルトと呼ばれていて、一面真っ白に覆われるの。そして朝には、除雪車が雪をすべて押し出して、新たな一日を送り始める音が聞こえるの。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。



ジュディは、静かな道、そして、通りの向こう側にはりんご畑があった。

Andra Summers were so bright and watermelon is one of my favorite fruits in the summer and something my mother always used to buy, and when we lived in the apartment, I remember I was five years old and my dad brought this, you know, big watermelon and cut it to eat in the kitchen all. And my mom usually put us to sleep in the afternoon, and I remember when I woke up, you know maybe 1 o'clock to 2pm or something, I could see and feel the sunlight in the room. Such a warm atmosphere.

カレンは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Judi It was a quiet road, a very very quiet road. And across the street was an apple orchard. Apples, pears, peaches. The nearest neighbor across the street was a minute or two walk… Far enough that you couldn’t hear voices.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

And the roads were just long and straight and… I used to like to walk on the roads in my bare feet. In the summer it’d be so nice. The tar would be nice and warm and you could walk on it barefoot. The roads were part of our playground, we were allowed to play in the road, which sounds strange.

ジュディは、静かな道、そして、通りの向こう側にはりんご畑があった。

Karen Not ice-creams but the shaved ice, you know. Oh man… when the guy would come around with the little cart and, you know, these bottles of colored god-know what that stuff was … Green and red and yellow and they poured it on top of the ice and it was like: what can be better than that?

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Sarah Whatever street you are on, there's gonna be lots and lots of trees and houses. The houses are quite far back from the road. Far back enough that there is at least a patch of green and usually gardens, maple trees.

アンドラは、静かな道、そして、通りの向こう側にはりんご畑があった。

And it’s in between two of the great lakes. Lake Huron and Lake Erie. It’s called the snow belt, because the condensation and wetness from the 2 lakes come and land there. It’s all, just covered in white, it’s all white. And then in the morning you can hear the sound of snow plows coming to push it all out of the way and starting a new day.

ラウラ

14年前は耐えたいと思っていたのよ。そして今… ここが我が家なのだから、故郷は変わるもの、本当にそう。私の母国語はスペイン語だけど、日常的には7歳のこどもとしかスペイン語で話さない。

ラウラは、静かな道、そして、通りの向こう側にはりんご畑があった。

Judi 私は森や林を歩いているとき、親族と電話で話すと決めている。その理由はまったく分からない。

ラウラは、静かな道、そして、通りの向こう側にはりんご畑があった。

カレン 私が思うに、そこにあるもの、どんな人、残されたものからもとても離れていると感じていて、それはほとんど… そう…言葉にしづらいのだけれど、ほとんど、つながりがないように感じているのね。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

ラウラ 高速道路から坂の上までに来たことを覚えている。つまり、青い海が見えることを期待して、それがなによりのご褒美だったという感じね。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

ジュディ ラジオも何もつけていないときの、車のエンジン音。夜、ただ一人で運転しているとき。自分が車を持っていて、いつでも好きなときに車を運転してどこへでも行けるのは幸せなことだと思う。それは感謝の気持ちかもしれない。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

カレン お分かりでしょうけど、周りには私と同じ姿の人がいないの。まったくね。私はよく言うの。もしそれが嫌で、そのことに冷静でいられなかつたら、今ごろ私は気が狂っていたでしょうねって。でも、それはもう私にとって何の意味もないようなもので、何の意味もないの。なんて言ったらいいかしら? どうでもいいの。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Karen I don't know if you can tell, but obviously there is no one around that looks like me. Like… ever. I often say: If I wasn’t comfortable with that, if I wasn’t cool with that, I would be insane by now. But it’s just like, it doesn’t mean anything to me anymore, it just doesn’t mean anything yeah… what can I say? I don’t care about this.



サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Laura It was unbearable for me 14 years ago. And now… this is home. So, home changes, yes.

ラウラは、静かな道、そして、通りの向こう側にはりんご畑があった。

My native language is Spanish, but on a daily basis I only speak Spanish with seven-year-old children.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Judi I choose to speak on the phone to my kin when I’m walking in the forest or woods. I have no idea why.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Karen I can only suggest that I feel so removed from anything that’s there, any person, anything that is left, that it’s almost… yeah… I don’t wanna… it’s hard to say, it’s almost like, I feel like there’s not a connection.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Laura I remember that you arrived from the highway, to a hill. So, it was like, hoping to see the blue sea and it was like the biggest reward.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Judi It’s the sound of my car engine, when there is no radio on, nothing. At night, just driving alone. I feel lucky to have a car and to be able to drive a car and get myself whenever I need to when I want to. A sense of appreciation maybe.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Karen I don't know if you can tell, but obviously there is no one around that looks like me. Like… ever. I often say: If I wasn’t comfortable with that, if I wasn’t cool with that, I would be insane by now. But it’s just like, it doesn’t mean anything to me anymore, it just doesn’t mean anything yeah… what can I say? I don’t care about this.

ラウラ

そして、バイクに乗っている者だけが自由を感じることができた。ここから逃れられるという開放感だった。

ラウラは、静かな道、そして、通りの向こう側にはりんご畑があった。

ジュディ アメリカとカナダの間の五大湖はとても大きくて、向こう側が見えないの。水平線と、波と、太陽だけなのよ。ここからそう遠くないところに湖があって少なくとも月に一度はそこへ行って、波の音を聞いているの。そうしていると、少し故郷を思い出す。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

サラ ここで歳を重ねることで、視野が広がって…少しはリラックスできるようになってきたと思う。だから、同じ質問を何度も繰り返されても気にしない。C'est la vie

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

アンドラ どうやら移民は2つに分けられているよね。つまり、どの国にも属しているわけではないけれど、両方の国に心と魂を込めて生きているのね。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

ラウラ いつまでいるかわからないから…皿などはほとんど百均で、いつかまた移住するかもと思っているから。でも、もう10年も経っている。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

サラ ここから見えるでしょう?海の向こうは三重県なの。そこには「津」と呼ばれる小さな町がある。すぐそこよ。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Laura

And only the ones who were riding a motorcycle could feel free. It was this sense of freedom of escaping this.

ラウラは、静かな道、そして、通りの向こう側にはりんご畑があった。

Judi There are five great lakes between the States and Canada and it’s so big that you can’t see the other side. It’s just the horizon, and, you know, the waves and the sun. There is a lake not far from here, and at least once a month I go there, and the sound of the waves just reminds you of home a little bit.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Sarah I think aging here is helping me get a better perspective and… relax a little bit. So I don’t mind getting asked the same question over and over. C’est la vie.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Andra Somehow you are broken in two. So, you don’t belong to any country but you are actually living with your heart and soul in both of them.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Laura We don’t know how long we will stay so… Most of our dishes are 100 yen, because we are always thinking like—we are going to move, but it’s been a decade.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Sarah You can really see it from here, right? You know that across the water, there, is Mie prefecture. Right across there is a little town called Tsu. It’s right there.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

アンドラ 若いうちは自分の最期なんて考えないけど、年月が経つにつれて考えるようになる…自分が何をすべきか、残された人たちが私の体をどうしたいか、そういうことなんかも考えなきゃいけないのよね。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

ジュディ 水泳はもっといい。ずっと動いていても水に囲まれた状態にある。だから、体全体が何かを感じているのね。でも同時に、水が自分の全身を覆っているのを感じる。そして、晴れていれば屋外のプールで、太陽が波でパターンを作り、泳いでいるときもプールの底でそのパターンを見ることができる。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

カレン 私はもう年寄りで、思い出の中に生きているというわけでは無いけれど、十分に思い出を持つ年齢になったわ。そして、ありがたいことに、その多くはとても良いもので、本当に有意義なものだった。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

サラ 年齢も関係していると思う。今は、この環境を受け入れられるようになった。20代のころは、「早く故郷に帰らなきゃ!」という焦りがあって、なにか見逃しているような感覚もあった。でも今は、ここで暮らしている時間のほうが長いし、年齢も重ねているので、その切迫感はあまり感じなくなったね。逆にカナダにいるときは、感じることもあったりする。日本での生活がより具体的なものになってきたから。これが私の人生、私の家族であり、私の夫なの。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

ラウラ 夜、墓地に行くと、すべての人が人生を謳歌している。親しい人たちの人生を祝っている。そうすると絆が感じられ、彼らが本当にそこにいるように感じられ、私たちはそれを本当に信じている。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

アンドラ 若いうちは自分の最期なんて考えないけど、年月が経つにつれて考えるようになる…自分が何をすべきか、残された人たちが私の体をどうしたいか、そういうことなんかも考えなきゃいけないのよね。

ジュディ 水泳はもっといい。ずっと動いていても水に囲まれた状態にある。だから、体全体が何かを感じているのね。でも同時に、水が自分の全身を覆っているのを感じる。そして、晴れていれば屋外のプールで、太陽が波でパターンを作り、泳いでいるときもプールの底でそのパターンを見ることができる。

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Karen

I’m an old person now, so, and it’s not like I am living in my memories, but I am old enough to have memories. And, thankfully a lot of them were quite good and really positive.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Sarah I think age has a lot to do with it too. I’m more accepting of the space now. Whereas, when I was here in my 20s, there was this urgency: like, I need to get home! there was this feeling that I was missing out, somehow. But now, because I spend so much time here, and I am older, the urgency isn’t there as much. I don’t feel like I am missing out. And I feel it more the other way around, when I am in Canada. This life has taken on more of a concreteness. This is my life, my family, my husband.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Laura In the night you go into the cemetery, and all the people are there celebrating life. The life of their dear ones. So, it’s like a connection, we feel like they are there, we really feel it, we really believe it.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Andra When you are young you don’t think of the end of your days, but, as years pass by you try to… you have to think of what you should do, or what the remaining others will do with your body or something.

サラは、アイスクリームじゃなくて、かき氷だよ。

Judi Swimming is even better, because you get the constant motion but you are surrounded by the water. So, your whole body is feeling something. But at the same time, you can feel, the water is just all over you, and you can feel that. And then, if it is sunny, in the pool outside, it makes the pattern the sun makes with the waves, and you can see it in the pool bottom as you are swimming.

カレン

大きな看板が見えて、こう書いてあるの。OST. O, S, T, この3文字だけでチーズを意味する。看板を目にしなくても、チーズの香りがしてくるので、そのお店がそこにあることが分かる。



アンドラ

左側には印刷工場のようなものがある。チャウシェスクの時代には新聞を印刷していたところだった。印刷されたばかりの真新しい新聞の匂いを感じる場所だった。

サラ

道は曲がって、家が見えてくる。大きな家もある。道が曲がると、道も曲がる。

サラ

道は曲がって、家が見えてくる。大きな家もある。道が曲がると、道も曲がる。

道は曲がって、家が見えてくる。大きな家もある。道が曲がると、道も曲がる。

サラ

本当に驚いたことには…、ほとんど倒壊寸前の家があること。入るのすら危険そうな家。でも、もしかしたら、日本のこういった家のほとんどはすでに廃墟なのかもしれないね。



サラ

散歩がてら、鳥居に腰掛けてみる。そして…ときには缶ビールや小さな缶のスパークリングワインを持って行って、座って乾杯して…。

ここにいると、より深い精神性が生まれてくると思うの。自然とのつながり、家族や亡くなった友人とのつながり。とくに夕方5時にここで、このような乾杯をするとね。だから、どの場所も特別なんだと思う… ね？この道の先にある、私たちが「Our Beach」と呼ぶ場所にはトイレがあって、それは船のような形をしているのよ。道の先には船があって、階段に座って…

サラ

道は曲がって、家が見えてくる。大きな家もある。道が曲がると、道も曲がる。



Karen

You could see a huge sign, and would say: OST. O, S, T, just those 3 letters, which means cheese. And you didn't have to see the sign before you knew the shop was there, because you could smell the cheese.



Andra

In the left part we have like a tipografie, 印刷屋… print factory! In Ceausescu times, where they printed the newspaper. Like… you could feel the smell of the new, fresh, printed newspaper, or something like that.



Judi

The city where I am here is in central Fukushima, kind of the mid-section. The coastal part of Fukushima gets very little snow. But the mountain area, it's called Aizu, that area gets a lot of snow, quite deep. Usually a wetter, heavier, more humid snow. So… your feet don't squeak or crunch very much in the snow.



Something really surprises me, that's… some houses seem to be almost falling apart. They look so, so, so dangerous to even enter… But maybe, in Japan, maybe most of the houses like this are abandoned.

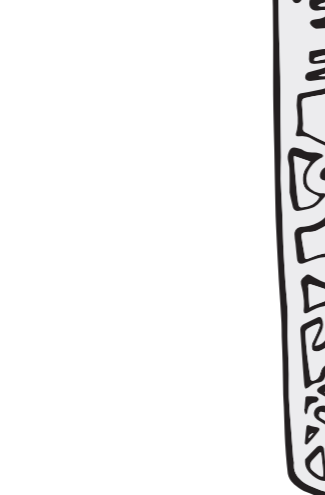
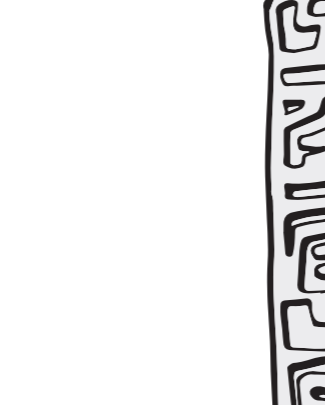


Sarah

The torii, when we go for a walk and just sit there. And… sometimes we just bring a can of beer or I have a little can of bubbles, and we just sit there and have a toast to… I think being here has created that—a deeper spirituality too. Just the connection to nature and family and friends who are gone. ‘Specially at 5 o'clock we have this kind of toast.

サラ

So every place is kind of special, I guess… you know? Even just down there, right at the end of the road here, I call it “Our Beach”, there is a WC, and it's shaped like a ship, so even just when we get to the end of the road and the ship is there, we sit on the steps…



Andra

私は、昔は愉快な人だったのに、こんなにも…面白くない、その…以前のようには人生を楽しめなくなってしまったのではないかと思っているの。だから(私が運営している)レストランの外でも、より日本人らしく振る舞っているような気がする。

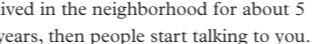
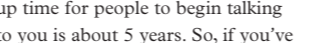
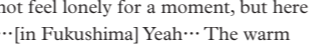
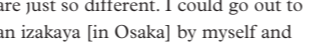
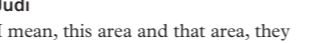
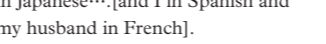
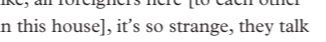
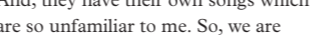
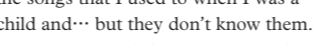
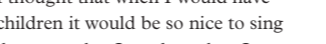
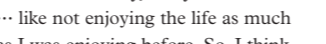
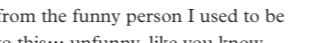
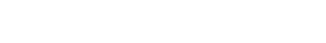
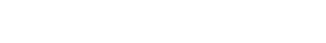


サラ

こどもができれば、自分がこどものところに歌っていた歌と一緒に歌えたらいいなと思っていたのだけど… こどもはその歌を知らないの。そして、彼らには彼らなりの歌があり、それは私にはとても馴染めないものだった。だから、この家では私たちはみんな外国人みたいなもので、とても奇妙なのよ。彼らは日本語で話すし… (私はスペイン語で、夫はフランス語で話すの)。

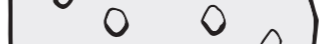
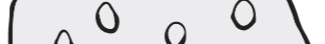
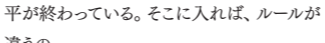
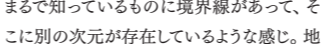
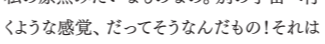
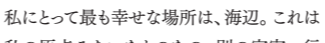
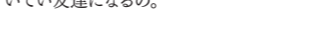
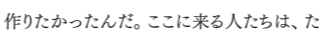
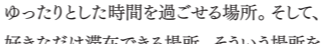
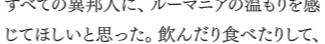
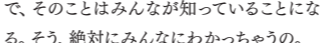
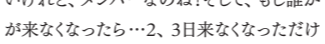
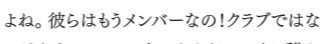
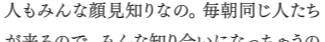
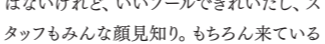
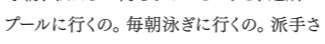
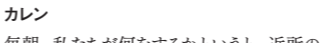


ジュディ つまりこのへんとあのへんじゃ、全然違うんだよ。大阪の居酒屋はひとりで行っても寂しくないけど、福島は… そうね。5年ぐらい住んでいて、ようやく近所の人が声をかけてくれるようになる。



サラ

…そして戻って来て、村の中心部に行くと、そこには田んぼと…小さな家と…小さなあぜ道。まだすべてのあぜ道を通ったわけではないけど、わたしは自転車で探検をする。そして、時には階段が多すぎて、自転車を停めて歩いたりしていた。大学に入って、音楽をちょっとやめたしまったの。ほかに興味が移ったから。でも、いつもミュージシャンのそばにいたのは確か。いつもバンドのライブを見たり、音楽を聞いたりして、演奏するにしろミュージシャンに囲まれるにしろ、私の生活の一部になっていた。夫と出会ってから、自然とそうなっていった。

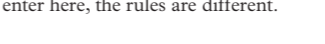
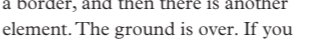
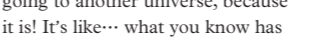
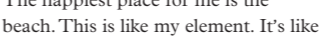
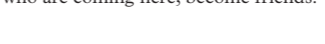
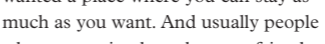
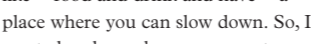
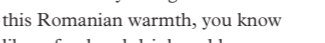
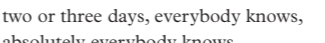
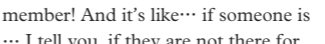
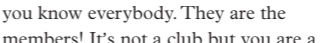
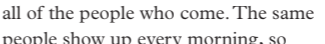
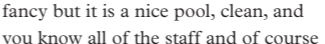
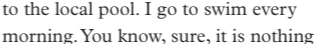
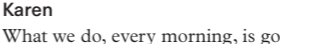


Sarah

…and then you come back and then you go into the heart of the village and there are rice fields and… little houses… and tiny little alleys. And I take my bicycle and I still haven't been down to every little one. I go and explore and sometimes it's just too many steps and I park my bike and walk all around.

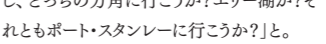
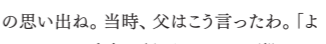
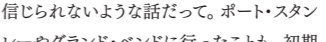
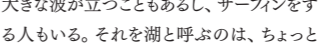
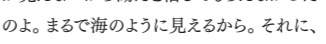
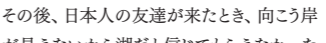
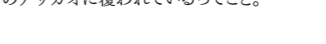
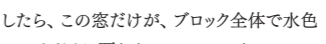
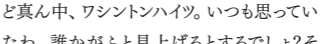
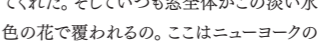
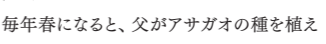
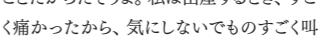
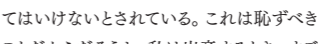
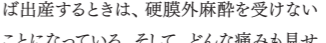
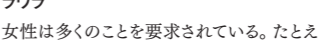
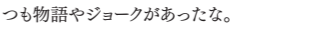
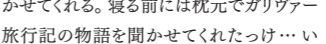
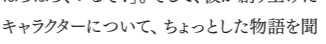
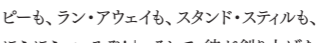
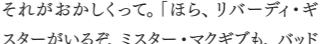
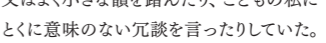
サラ

Once I hit university, it kind of stopped. Um… I got other interests, but I was always around musicians. I was always seeing bands, hearing music and it's just always been a fabric of my life, whether I am playing it or surrounding myself with musicians. And then, when I met my husband it just kind of naturally dovetailed.



ジュディ

私はこどもの頃、とてもいい子にすることを求められていて、多くの時間、静かにしていなければならなかった。静かにしていなければならなかったのは声だけじゃなくて、体もだったの。だから、こどものころに体をなるべく動かさないようにすると、他の感覚から情報を取り入れる方法を学ぶことができると思うの。



ラウラ

すべてのメキシコ人を知っていると思う。私たちは10人か20人くらいだから… そのうちの1人は私の親友で、彼女は浜松でメキシコ料理のレストランを経営している。ここは私にとってリトル・メキシコなの。私はメキシコへ行くたびに、彼女のレストランで使えそうなものを彼女のために持って帰る。彼女、実は昔レスラーだったんだよ。ル チャリブレ！

アンドラ
私のとなりに座りたくない？
お客さん
ノーノーノーノー、仲良しだから。

カレン
夫が亡くなってから、彼女はやめてしまったけど、私は彼女にもう一度来るように勧めている。だって、とてもいいグループだったんだもの。私たちは15人くらいの女性グループで、みんな同じくらいの年齢だし、先生も素晴らしいし… とにかく、彼女は近所で一番の友達なんだもの。

ジュディ
第一段階は、ゴミ出しのときの挨拶から。だいたいの人が少なくとも週に2、3日はゴミを出していて、その時間帯はだいたい朝6時から8時のあいだという決まりがある。つまり、ゴミ出しと挨拶が第一段階というわけね。もうひとつの段階は、何らかの災害があった場合だと思う。ここは地震が多い地域だし、私たちの建物は少し古いので、ときどき水が出なくなるの。それが次のステップのようなもの。お互いに信頼し合い、話し合う。そして次の段階は、誰かが誰かに手を差し伸べたいと思うことだね。野菜の交換!それは母国の人たちに説明するのがとても難しかった。このマンションに5、6年住んでいて、やっと友達ができただ。だから、野菜の交換はトップレベルの友情の証だと思うの。

サラ
自分でも知らないうちに、船に魅了されるようになったのよ。私は船の運航アプリを使っでいて、椅子に座りながらも船が来るのを見ることができるし、このアプリでは、船がどこからやって来たのか見ることもできる。もちろん、こちらの方向へ来るのであれば、名古屋港に行くのでしょう。そして出て行く船がどこに行くのか、船の大きさや何を積んでいるかを調べながら考えるの。だから、双眼鏡が新しく私の道具になったんだと思う。今まで意識したことはなかったけどね。ここにいるときは毎日使っている。

Laura
I think I know all of the Mexicans, we are like 10 or 20… And one of them is my really good friend, and she has the Mexican restaurant [in Hamamatsu]. This is like my small Mexico. All the decorations, and every time that I used to go to Mexico, I used to bring her something for the restaurant. And she used to be a wrestler. Lucha libre!

Andra
私のとなりに座りたくない？
Customer
ノーノーノーノー、仲良しだから。

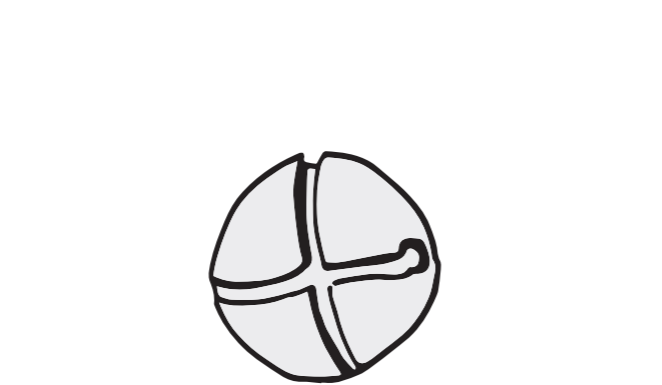
Karen
After her husband died, she quit. And I’ve been trying to encourage her to come again. Because it was such a nice group of people, we were like 15 women, we’re are all about the same age, and the teacher is wonderful… Anyway, she is my best friend in the neighborhood.

Judi
The first stage is saying hello when you are taking your garbage out. Most people have to take their garbage out at least a couple of days per week, and there is a time frame that is usually between 6 and 8 in the morning. So, that’s like step one, taking out the garbage and saying hello.

I think another step to that is if there is some kind of disaster. We have a lot of earthquakes here. And our building is a little bit older, so we lose our water supply sometimes. That’s kind of like the next level. You know, trusting each other, talking to each other.

I’d say the next level is when someone wants to reach out to the other person. The exchange of vegetables! That is something really hard to explain to people back home, but I’ve been here five or six years in this building, finally I have a friend. So, the vegetable exchange is kind of the top level of friendship.

Sarah
It became kind of a fascination I never knew I had, with the ships. So, I have a shipping app, and I can sit over there on my chair and I watch the ships coming, and in my shipping app I can see where they came from. And, of course, if they are coming this way, they are going to Nagoya port, which is down that way. And if they are going out, I try to figure out where are they going to, the size, and what they are carrying. So, my binoculars have become, I guess, a new tool. I never thought about that. And I use them every day when I am here.



ラウラ
きみがよはちよにやちよにさざれいしのいわおとなりてこけのむすまで歌えるけど言葉の意味はわからない。
Laura
きみがよはちよにやちよにさざれいしのいわおとなりてこけのむすまで[I can sing it, but] I don’t know what it means…
カレン
私は5Wに住んでいたの。5 Westという意味で、それから5 Eastもあったわね。ご存知?ニューヨークのアパートで、古いもので、「テネメント」と呼ばれるものだった。
ラウラ
Era un conjunto de edificios. They were so many buildings, like an alphabet. I was living in the “P. At least there was until K, L, M? at least 10, of these buildings.
Laura
Era un conjunto de edificios. They were so many buildings, like an alphabet. I was living in the “P. At least there was until K, L, M? at least 10, of these buildings.
Andra
Strada Uranus numarul 13だったと思う。はっきり覚えているのは、この住所だけ。そして6号室。

カレン
私は5Wに住んでいたの。5 Westという意味で、それから5 Eastもあったわね。ご存知?ニューヨークのアパートで、古いもので、「テネメント」と呼ばれるものだった。
Karen
I lived in 5W, which meant 5 West, and then there was 5 East. You know? It was a New York City apartment building, an old one, a tenement they would call them.
Laura
Era un conjunto de edificios. They were so many buildings, like an alphabet. I was living in the “P. At least there was until K, L, M? at least 10, of these buildings.
Laura
Era un conjunto de edificios. They were so many buildings, like an alphabet. I was living in the “P. At least there was until K, L, M? at least 10, of these buildings.
Andra
Strada Uranus numarul 13, I think. It’s the only address I remember clearly, even now. And apartment 6.

ラウラ
Era un conjunto de edificios. They were so many buildings, like an alphabet. I was living in the “P. At least there was until K, L, M? at least 10, of these buildings.
Laura
Era un conjunto de edificios. They were so many buildings, like an alphabet. I was living in the “P. At least there was until K, L, M? at least 10, of these buildings.
Andra
Strada Uranus numarul 13だったと思う。はっきり覚えているのは、この住所だけ。そして6号室。



ルイーズ・ラウス
Louise ROUSE
ルイーズ・ラウス は東京を拠点に活動。ジェンダーとトランスナショナルな主観性に関心を持ち、研究をしている。現在は、東京藝術大学博士課程に在籍し、ロンドン藝術大学の客員講師、またテンプル大学ジャパンキャンパスのアート学科で特任教授を務める。
Louise Rouse is an artist in Tokyo with research interests in gender and transnational subjectivity. Currently completing a PhD at Tokyo University of the Arts, a visiting associate lecturer at UAL London, and faculty for printmaking and new media at Temple University, Japan Campus.

Education	
2022–Present	PhD Tokyo University of the Arts, Fine Art Department
2009–2011	MFA Tama Art University, Design Department
2004–2007	BA University of the West of England, Illustration Department

Training	
2012–2018	Apprentice with Master Ukiyoe Woodblock Carver Asaka Motoharu
2018	Studied woodblock printing with Master Ukiyoe Woodblock Printer Shinohara Keiji
2018	Studied intaglio printmaking with Tony Rosati, Pennsylvania Academy of Fine Art

Solo and Duo Exhibitions	
2021	“Invisible Cities,” HAGISO, Tokyo
2021	“Homespun,” Nakanoyo Biennale 2021, Gunma
2015	“Solo at 30,” Sendagi Kukan, Tokyo

Select Group Exhibitions	
2022	“Katsue Inoue and Friends,” Keio Plaza Hotel, Tokyo
2022	“Between Worlds,” Kentler International Drawing Space, New York
2021	“300km,” Eugeniusz Geppert Academy of Art and Design in Wroclaw, Poland
2021	“The World Between the Block and the Paper,” Southern Vermont Arts Center, Manchester
2021	“Artists as Independent Publishers,” Zentrum für Künstlerpublikationen, Bremen, Germany / Frans Masereel Centrum, Kasterlee, Belgium
2019	“SETOUCHI ART BOOK FAIR,” Setouchi Triennale, Kagawa
2019	“Out of Bounds,” Bloc Projects, Sheffield, UK
2018	“Vagina Smagina,” Printed Matter, New York
2018	“Tabi,” Setagaya Art Museum annex Taiji Kiyokawa Memorial Gallery, Tokyo

Residencies	
2023	UAL Creative Computing Institute, Camberwell College of Arts, London
2023	National College of Art and Design, Dublin

Select Publications	
2023	<i>Archival Glitch: Art + Feminism in Asia-Pacific Entanglings</i> (Anthology editor,Sugarlift Press)
2023	Lynam, I., <i>Fracture: Japanese Graphic Design 1875–1975</i> , (Editor,Onomatopee)

Conference Papers	
2022	“Mis-registered,” Research Methods in Visual Arts Symposium, RMVAS, Wroclaw, Poland
2021	“Invisible Cities,” One University, One Book, University of Europe for Applied Sciences, Hamburg, Germany
2020	“Syncretic Types: Polyphony in the Typography of Tokyo,” The 3rd EU-Japan Young Scholars Workshop, Hosei University and Centre Européen d’Études Japonaises d’Alsace

アグスティン・スピネット
Agustín SPINETTO
アグスティン・スピネット はアルゼンチン出身で東京を拠点に活動する音楽家、サウンドアーティスト。時間、距離、社会的良心という共通項のある作品づくりをする。現在、テンプル大学ジャパンキャンパスのコミュニケーション学科で特任講師を務める。
Agustín Spinetto is a musician and sound artist from Argentina based in Tokyo. Along his art work it is possible to recognize a common thread of time, distance and social conscience. At present, faculty for Audio for Media and Sound for Visual Media at Temple University, Japan Campus.

Education	
2019–2021	M.M. Tokyo University of the Arts, Musical Creativity and the Environment Department - Japanese Government MEXT Scholarship
2003–2009	BA University of Tres de Febrero, Electronic Arts Department
Solo and Duo Exhibitions	
2020	“You Are Here // 現在地,” AYUMI GALLERY, Tokyo (Art installation produced in collaboration with the graphic designer Roni Shvartz)
2017	“Hertz Festival,” Big Sur Gallery, Buenos Aires (Surround sound and music intervention by the Villa-Spinetto duo)
Group Exhibitions	
2022	“3331 ART FAIR 2022,” 3331 Arts Chiyoda, Tokyo (Selected by TOKAS)
2021	“Alternation,” Opera Viva Research Colloquium, University of the Arts London (Immersive video performance, collaboration with the artist Louise Rouse)
2009	“El viaje quieto,” UNTREF Platform
2008	“El viaje quieto,” UNTREF Platform (Curated by Graciela Taquini - Culture and Media III)

Music and New Media Festivals	
2022	<i>30-hour dream</i> ,” AIMC 2022,” Artificial Intelligence Music Conference, on-line
2021	<i>Visitor</i> ,”MINUTE_MAPP TOKYO 2021,” (Media art collaboration with Manual Palenque) Chroniques Award
2021	<i>At the end, there is a melody</i> ,”AIMC 2021,” Composition performed at Artificial Intelligence Music Conference, online, / “New York Electroacoustic Music Festival 2021,” online / Tokyo University of the Arts Festival, online
2020	<i>A short period of time and sound</i> ,”International Computer Music Conference- Max Summer School,” Tokyo University of the Arts / “Seoul International Computer Music Festival,” Seoul Arts Center, “New York Electroacoustic Music Festival 2020,” online / “Tama Music Festival, Tokyo,” “Geisai – Tokyo University of the Arts Festival,” Tokyo University of the Arts
2015	<i>Anglade, Ford, Spinetto Trio</i> ,”Pulso Music Festival,” UNTREF University, Buenos Aires
2006	<i>Estructuras VI</i> ,”Imaginary concerts,” UNTREF University, Buenos Aires

Music for Films and Videos	
2021	<i>Paper Houses</i> by Louise Rouse (Original Music)
2021	<i>A break in the clouds</i> by Anna Takagi (Original Music)
2010	<i>La Huelga</i> by Diego Marcone (Original Music, “INCAA Competition for Short Film in Digital 2010” award)

Music Releases	
2022	<i>Sekiguchi Storyteller</i> , (Part of the compilation album Visions, Far Future Label)
2022	<i>Made in Ueno</i> , EP (Ultrapop)
2018	<i>Heroes</i> , LP (Ultrapop)
2017	<i>Despertadores</i>
2016	<i>Explota el Sol</i> , El orgullo de mamá (Ultrapop)
2013	<i>Campeón Mundial</i> , El orgullo de mamá (Ultrapop)
2010	<i>El orgullo de mamá</i> , El orgullo de mamá (Ultrapop)

OPEN SITE 7

ルイズ・ラウス & アグスティン・スピネット「Sounds from Liminal Towns」

会期	2022年12月10日(土)～2023年1月22日(日)
会場	トーキョーアーツアンドスペース本郷
主催	公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 トーキョーアーツアンドスペース
協力	東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクト、屋台久留米ラーメンとんぱ〜れ、ハーブ農園リッコ(リッコカフェ&ガーデン)、小澤美波、中原小季
会場施工	wood planet、James Lambiasi Architect、スーパー・ファクトリー株式会社
執筆	ルイズ・ラウス、アグスティン・スピネット、ゴロウィナ・クセーニヤ
編集	岸本麻衣 辻 真木子、杉原 駿(トーキョーアーツアンドスペース)
写真	高橋健治
翻訳	ルイズ・ラウス
デザイン	寺井恵司
印刷	三永印刷株式会社
発行	公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 トーキョーアーツアンドスペース
発行日	2023年3月28日



Louise Rouse & Agustín Spinetto "Sounds from Liminal Towns"

Date	2022/12/10 (Sat) – 2023/1/22 (Sun)
Venue	Tokyo Arts and Space Hongo
Organizer	Tokyo Arts and Space, Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
Cooperation	Tokyo University of the Arts "I LOVE YOU" project, Yatai Kurume Ra-men Tonpa-re, Ricco Café, OZAWA Minami, NAKAHARA Saki
Installation	wood planet, James Lambiasi Architect, SUPER FACTORY Co., Ltd.
Texts	Louise ROUSE, Agustín SPINETTO, Ksenia GOLOVINA
Edit	KISHIMOTO Mai TSUJI Makiko, SUGIHARA Shun (TOKAS)
Photography	TAKAHASHI Kenji
Translation	Louise ROUSE
Design	TERAI Keiji
Printing	Sanei Printery Co., Ltd.
Published by	Tokyo Arts and Space, Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
Published on	March 28, 2023

<https://www.tokyoartsandspace.jp/>

Sounds from Liminal Towns was produced through a creative collaboration
Name | Year of Birth | Date of Migration

